派遣国	ルーマニア	派遣都市	クルージュ・ナポカ
出国年月日	2018 年 8 月 27 日	帰国年月日	2018 年 9 月 18 日
法政大学との共催団体名（受入団体名）	UBB		
主な活動内容	ARHIMAR でのインターンシップ		

1. 活動内容

このプログラムでの活動は主に Cluj-Napoca に拠点を置く建築会社 ARHIMAR においてのインターンシップである。これに加えて、最初の週には Babes-Bolyai University の教授にレクチャーをしていただいたり、週末には様々な場所へ観光に連れていっていただいたりした。レクチャーの内容はルーマニアの社会と文化について、クルージュ・ナポカ、シビウ、アルバユリアなど、それぞれの都市の形成について、プレゼンテーションの方法についてであった。ARHIMAR では主に今年の冬に着工予定の集合住宅の屋上部分におけるテラスの設計を行った。私はまだ CAD が使えず、唯一出来るソフトが授業で習った sketchup だったので建物のデータを sketchup に変換してもらい設計を行った。最初に言われたことはウッドデッキを作ること、人々が座れる部分を作ること、いくらかの植物をおくこと、シンプルに設計すること、のみだった。最初は戸惑ったが、設計者や他の建築家と相談してベンチの形や大きさ、スペースの確保、植物を置く位置、デッキの形など細かい部分まで決まっていった。特にベンチの形については人々がよりコミュニケーションをとりやすいようにするために何度も形や長さについてアドバイスをもらい修正する作業を繰り返した。他にも植物を囲う柵なども高さを細かく指定された。屋上テラスの設計が一通り完成した後少し時間が余ったのでプレゼンテーション用の動画を作成した。プレゼンテーションではインターンシップで行ってきたことと会社の紹介に加えて、日本文化のひとつとして風呂敷について紹介した。

また、私は古い建築のリノベーションやコンバージョンに興味があり、その話をしたところ ARHIMAR のオフィス自体もリノベーションされた建物だったので竣工時の様々な写真を見せてもらった。

2. 特筆すべきエピソード

私が建築学を専攻しているということもあって、他大学で都市計画の先生をしている建築家の方を招いてレクチャーをしてもらった。レクチャーのあとは実際にクルージュの街を歩いて様々な建築を紹介してくださった。また週末には古都シギショアラやシビウを観光した。様々な要塞教会を見て回り、都市ごとに異なる建築様式を紹介してくださった。これらの体験は建築学を学んでいる私にとってとても貴重なものとなった。

また後悔したことの一つとして、建築会社のインターンに行くならばポートフォリオなどの何かしら今までの自分の作品を説明出来るものを準備していく、ないしそれらを英語で説明出来るようにしておくべきだったと思う。実際に今までの作品を見せてほしいと言われたときに写真や図面をすぐに出せるようにしておきたかった。

3. 苦労したこと

様々な場面で英語が通じない場面があったので自分の聞きたいことが聞けなかったり、相手の話を理解するのに苦労したりした。また会社の方たち同士ではルーマニア語で会話をするので、昼食の時など話に入っていけなかったり逆に気を遣ってもらったりした。それでもルーマニア語の単語を少しでも覚えたことにより、相手の言いたいことがより理解できるようになった。

また、初日の度重なる飛行機のキャンセルと遅延により、スケジュールが押したこともあり最初の週は睡眠時間が足りず体力的にきつかった。体調管理には十分注意した。

4. 身に付いたこと

積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢が身についた。インターンシップが始まったばかりの頃は英語で会話をするのも慣れず苦労していたが、最終週には自分の言いたいことが英語で積極的に言えるようになった。また最初のうちは英語が少し聞き取れなかったときに生返事をしてしまうことがあったが、それも時間が経つにつれてわからないことを積極的に聞き返す姿勢が身についた。さらに途中でルーマニア語の辞書を買って、ルーマニア語のいくつかの単語や挨拶などを覚えたことにより会社の方や教授たちとのコミュニケーションがより広まった。

5. 今回の経験を経て感じる「グローバル人材」像とは何か

英語ができることは必須であるが、加えて相手の文化を受け入れる寛容性とコミュニケーション能力をも兼ねそろえている必要があるのではないかと感じた。ルーマニアの方々は、ルーマニア語はおろか英語もままならない私に対して、昼食のメニューを訳して説明してくださったり、タクシーを呼んでくださったり、会話に入れてくださったり、様々なサポートを何一つ嫌な顔をせずにしてくださった。それだけでなくルーマニアの歴史や文化について深い理解を持ったうえで日本の文化にも興味を示していた。ルーマニア語を教えてもらったり日本語を教えたりすることでコミュニケーションの幅も広がった。このように自国のことをよく理解したうえで相手の文化を受け入れること、それが十分にできるだけの英語力を持っていることが重要だと考える。

6. 後輩へのメッセージ

このプログラムは自分の興味のある分野や専攻している分野に応じてインターン先を選ぶことが出来、また実際に会社でインターンをさせてもらえるだけでなく大学でのレクチャーや観光など様々な体験ができる大変充実したプログラムになっているので、理系の学生でも是非参加してほしいと思う。単に英語力やコミュニケーション能力が身についただけでなく、自分が将来どういった方向に進みたいのかなど、自分を見つめなおす大変良い機会になったので、学年、文理問わず是非挑戦してみてほしい。

7. 写真

インターンシップ報告会の日
UBB の方々と

ARHIMAR の方々

社内の様子

Belis にて